第 1 回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会　議事録

日時:　平成 27 年 8 月 6 日(木)10:30～
場所:　STV 北 2 条ビル地下1階AB会議室

出席者:

〇委員(五十音順)

浅香　博文　委員	(一社)札幌市障がい者スポーツ協会会長
石橋　達勇　委員	北海学園大学工学部建築学科　教授
石水　創　委員	石屋製菓株式会社　代表取締役社長
小笠原　歩　委員	カーリング選手(北海道銀行フォルティウス)
加森　公人　委員	加森観光株式会社　代表取締役社長
川本　謙　委員	株式会社土屋ホーム　取締役副会長
久保　恒造　委員	車いす陸上選手(日立ソリューションズ)
小林　英嗣　委員	北海道大学　名誉教授 (一社)都市・地域共創研究所　代表理事
霜觸　寛　委員	(一財)札幌市体育協会　会長
豊島　亮　委員	公募委員
中田　美知子　委員	前 FM 北海道(AIR-G´)アナウンサー　常務取締役
原田　雅彦　委員	元スキージャンプ選手、雪印メグミルクスキー部監督
原田　宗彦　委員	早稲田大学スポーツ科学学術院　教授
穂積　雅子　委員	元スピードスケート選手
三谷　まゆみ　委員	公募委員
山本　理人　委員	北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科　教授
(欠席)	
志済　聡子　委員	日本アイ・ビー・エム株式会社　執行役員 インダストリー営業統括　公共営業本部長

〇事務局職員

石川　敏也	(札幌市観光文化局スポーツ担当局長)
西田　健一	(札幌市観光文化局スポーツ部長)
梅田　岳	(札幌市観光文化局スポーツ部　招致推進担当部長)
久米田　真人	(札幌市観光文化局スポーツ部企画事業課　計画担当課長)

次第：

１　開会

２　秋元市長挨拶

３　議事

（1）　委員長選出

（2）　資料説明

（3）　意見交換

４　閉会

≪配布資料≫

資料 1　冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会設置要綱

資料 2　冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会委員一覧

資料 3　冬季オリンピック・パラリンピック招致の経過

資料 4　冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール

資料 5　冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務（平成 26 年度実施）抜粋

資料 6　Agenda2020 について

資料 7　冬季オリンピック・パラリンピックの招致に向けたコンセプトイメージ

参考 1　夏季冬季オリンピック・パラリンピック大会概要

参考 2　オリンピック・パラリンピック招致　開催決定各都市の勝因分析

参考 3　2022 冬季オリパラ招致 IOC 評価報告書概要

発言者	発 言 要 旨
１ 開会	
事務局	ただ今から第 1 回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会を開催させていただく。 委員長選任までの間、私、札幌市スポーツ担当局長の石川が議事を進行させていただく。 まず本委員会は、資料 1「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会設置要綱」第 4 条第 5 項により、委員の過半数の出席が必要とされている。本日の出席者は、委員 17 名のところ 16 名の皆様にご出席いただいており、会議が成立することをまずご報告する。
２ 秋元市長挨拶	
事務局	それでははじめに、秋元克広札幌市長より委員の皆様にご挨拶申し上げる。
秋元市長	冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げる。 皆様大変お忙しい中ご出席いただいたことに感謝申し上げる。 ご案内の通り、昨年 11 月に札幌市は 2026 年の冬季オリンピック・パラリンピックの招致表明をしている。これを受けて今年度、開催概要計画を策定する。その中では「なぜ札幌でオリンピック・パラリンピックを開催するのか」あるいは「この札幌で開催する大会がどのようにスポーツの世界、国際社会の中で貢献していけるのか」という開催コンセプトも含めて、この開催概要計画の中で検討させていただく。委員の皆様方にはその趣旨をご理解いただき、ご賛同いただきご就任をお引き受けいただいたことを改めて感謝申し上げる。 1972 年に札幌で冬のオリンピックを開催し、そのことが札幌のまちづくりの大きな根幹となっている。今回 2 回目となるオリンピック・パラリンピックの招致は、50 年後、100 年後を見据えたときに、例えば少子高齢化、環境などのこれからの時代の変革の中で、札幌をどういう街にしていくのか検討する大きなきっかけとなるものと考えている。 そういう意味で、単にスポーツの大会の招致をするということではなく、この札幌の街を今後どうしていくのか、またそのことがこれからの国際社会の中でどのように貢献していくのかを世界の中でアピールしていくことが大変重要となる。 今日はまちづくり、あるいはスポーツ、経済の分野の、そして一般市民の生活をされている委員の皆様から様々な観点からの意見を頂戴し、開催概要計画の策定を進めていきたいと考えている。それぞれのお立場で積極的にご発言をいただきたい。お忙しい中お集まりいただき、また策定までそう多くの時間が

	あるわけではないが、ぜひとも皆様方の知見を拝借し、よりよい開催概要計画の策定ができることを心からお願い申し上げ冒頭のご挨拶とさせていただく。
３ 議事　（1） 委員長選出	
事務局	続いて委員の皆様をご紹介する。 五十順に、お名前と現在のご所属を読み上げさせていただく。 （委員を資料 2「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会委員一覧」に沿って紹介） それでは、本委員会の委員長と副委員長選任を行いたい。 資料 1 の本検討委員会設置要綱の第 2 条第 3 項の規定に、委員の互選により委員長及び副委員長を置くこととしている。 どなたかご推薦のある方は、挙手の上ご発言をお願いする。
山本委員	委員長にはスポーツマネジメントがご専門で、過去のオリンピック・パラリンピック招致にもご尽力された早稲田大学教授の原田宗彦委員が、また、副委員長には札幌の都市計画に長く携わってこられた北海道大学名誉教授の小林英嗣委員が適任と考える。
事務局	ただ今、山本委員から委員長に原田宗彦委員、そして副委員長に小林英嗣委員のご推薦があったが、皆様いかがか。
各委員	異議なし。
事務局	それでは原田委員に委員長、小林委員に副委員長をお引き受けいただきたい。 原田委員、小林委員におかれては、委員長、副委員長席にお移りいただきたい。 （両委員が委員長・副委員長席に移動）
事務局	それでは、代表して原田委員長から皆様にご挨拶をお願いしたい。
原田委員長	私は 2008 年の大阪オリンピック・パラリンピック招致、2016 年の東京オリンピック・パラリンピック招致の前段階の仕事に携わり、日本オリンピック委員会の竹田会長といろいろな会議でご一緒した。そういう経験もあるのでお役立てればいいと思う。 2018 年は平昌、2022 年は北京と冬季オリンピック・パラリンピック開催が決まり、アジアで 3 回目となかなか厳しい戦いが予想される。私は 2008 年に北京と

	戦って強敵だったことを覚えているが、視点を変えると、今回北京と戦う必要がないこと、反対に北京の協力を得られる立場にあると思う。 もう一点、平昌、北京と冬の大会が続くので、アジアのスノーリゾート的な立ち位置が非常に強調されてくる。スキーヤーも増えるので、インバウンド観光にもプラスの影響となる、すなわち、北海道・札幌のスノーリゾートのグランドデザインをつくる上で、非常にいい流れが来ているのではないかと考えている。そのように楽観的にとらえている。 さらに札幌市では、スポーツコミッションを設置されるということで、長い期間のスポーツイベント招致などにもプラスになると思う。恐らくスポーツコミッションとオリンピック・パラリンピック招致が一緒に語られる活動は初めてか思う。 そういう意味でこの招致は非常に北海道、そして札幌のまちづくりのグランドデザインをつくる上で非常に厚みのある計画になるのではないかと期待している。 短い期間だが、委員の皆様の協力を得て、素晴らしい開催概要計画をつくれればと願っているので、ご協力よろしくお願いしたい。 （市長、公務の都合により退席）
（2） 資料説明	
原田委員長	それでは、資料説明に移りたい。 事務局からこれまでの招致の経過や今年度の開催概要計画策定スケジュール、本委員会でのコンセプトづくりのイメージなどの説明をお願いする。
事務局	（事務局から資料 3～7 に沿って説明）
（3） 意見交換	
原田委員長	それでは意見交換に移りたいと思う。 本委員会では開催の基本理念となる大会コンセプトについて、最終的に皆さんの意見をまとめることになるが、今回は第 1 回であるため、ご出席の委員全員から札幌市で再びオリンピック・パラリンピックを開催する場合、「どんなオリンピック・パラリンピックにするべきか」「オリンピック・パラリンピックを通じて何を遺すべきか」ご意見を伺いたいと思うので、ご自由にご発言いただきたい。 なお事務局は、委員のご発言のキーワードとなる部分を書き出し、ホワイトボードに掲出をしてください。このキーワードがコンセプト作りのベースとなる。 では席順に進めたいと思う。浅香委員からお願いする。
浅香委員	札幌でオリンピック・パラリンピックを開催する場合の私の理想は、できうる限りオリンピックとパラリンピックが融合した大会、できうる限りの範囲は大変難しい

	定義になると思うが、究極は同時開催と考える。 スポンサーの確保、日程の長さ、競技会場・選手村、ボランティアの獲得、パラリンピックの注目度低下の懸念など、課題があることは聞いている。しかしパラリンピックはオリンピックに対し全く遜色ない競技大会となっている。 パラリンピックの参加国は、オリンピックの約半数の 40 数か国で、選手・役員数は約 4 分の 1、選手数は 500 人程度となっている。 オリンピック参加国約 90 か国の中にはパラリンピックへの出場意向をもっている選手も多いと考えられる。特に大陸別ではアジア・アフリカ・中南米からは 10 か国程度の参加しかない。 オリンピックとパラリンピックを一緒に開催することを理念として、競技会場と都市基盤の一層のユニバーサル化、大会後の恒常的な発展途上国への支援を大きなコンセプトとすることによって、国連の唱える三つの差別「人種」「性」「障がい」の全てを解決した大会になるのではないか。 それが札幌で開催するオリンピック・パラリンピックの役割となるのではないかと考える。
石橋委員	専門としている医療・福祉の建築の立場からお話ししたい。 民俗学者の柳田國男氏の提唱された、儀礼・祭り・年中行事などの非日常を表す「ハレ」と日常を表す「ケ」という概念をご存知と思う。 この考えをスポーツに当てはめると、オリンピック・パラリンピックは祭典としての「ハレ」の場面となる。一方で「ケ」の場面は日常生活において国民であり札幌市民がスポーツに取り組んだり、楽しんだり、親しむという場面ではなかろうかと考える。 日常は「ハレ」の場面と「ケ」の場面が折り重なって継続している。これと同じように日常生活においてもスポーツに取り組む、楽しむ、親しむ延長線上にオリンピック・パラリンピックが存在すべきではないかと考える。 オリンピック・パラリンピックの開催には高負担を伴うため国民・札幌市民の理解を得ることが重要。理解を得るプロセスにおいて、日常生活、日常スポーツの延長線上にオリンピック・パラリンピックを位置づけた上での準備が必要。 札幌市民、特に高齢者や障がい者の日常生活、日常スポーツ環境の質的向上が重要。札幌市でも様々な取り組みが進められているが、例えば国の交通バリアフリー法におけるノンステップバスの整備についての基本方針（平成 22 年末までに総車両数の 30%、平成 32 年度末までに 70%）に対し札幌市はどういう状況か点検する必要がある。また、日常のスポーツを行う体育館の整備についても、利用者の 3 分の 1 が高齢者、3～5%が障がい者の利用と推計している。利用者の特性に見合った整備がなされているかチェックが必要。

	ノンステップバスは開催会場と市内を結ぶ交通手段として、体育館はオリンピック・パラリンピック出場者の日頃のトレーニングの場として利用できる。 最終的に少しでも多くの札幌市民が日常生活、スポーツ環境の質的向上を実感し、この姿を世界、日本に発信していくことが重要。
石水委員	私は 1972 年開催時には生まれていないため、札幌オリンピックと言われても今一つピンとこない。私は長野世代となる。一方で娘は長野オリンピックを知らない。やはりオリンピック・パラリンピックは生で見て体感すべきもの。 アルペンスキー競技を行っていた東洋大学在学中、長野出身のアルペンスキーやジャンプの選手から長野オリンピックの素晴らしさを聞き、かつて札幌で開催されたのにと悔しい思いをした記憶がある。 石屋製菓も札幌オリンピックをきっかけに伸びていった。地下鉄、真駒内競技場など、観光インフラも含めてインフラが整ったことが大きい。グルノーブル冬季大会記録映画(「白い恋人たち」)をきっかけに白い恋人、地下鉄南北線にちなんでシェルターというお菓子もできた。 一企業でも札幌オリンピックとの結びつきが多くあり、観光でもオリンピックをきっかけに伸びていったと聞いている。オリンピック・パラリンピックが、札幌・北海道が伸びていくきっかけになればよいと考えている。
小笠原委員	現役選手として、選手目線から発言したい。 カーリングは長野オリンピック・パラリンピックから加えられた競技だが、新たに増えていく競技にも対応しなければならない。各競技の拠点が全国に散らばっており、ウインタースポーツの拠点が札幌市・北海道に欲しい。夏の競技は 2020 年オリンピック・パラリンピック開催の東京で盛り上げ、冬の競技は招致をきっかけに札幌が選手強化の拠点となればいいと思う。 オリンピック・パラリンピックの開催前に盛り上がるのは大事だが、開催後も観光で、プライベートでもう一度来たいと思えるような大会にしたい。競技施設も、オリンピック・パラリンピック開催後に国際的な競技大会が継続して開催されるような都市になれば、市民にも愛着を持って応援してもらえるのではないか。 母親、一市民として、子育て世代、高齢者からも気持ちよく迎えられる大会となるようお願いしたい。
加森委員	加森観光は 1972 年札幌オリンピックの競技会場となったテイネを引き継いでおり、アルベールビル大会でも当社のスキー場が会場の一つになった。また知的発達障がい者のスペシャルオリンピックス第1回大会(アメリカコロラド州の都市スティームボートスプリングス)もふまえた上でお話ししたい。アルベール

	ビル大会には本当にお金をかけていない。委員の打ち合せは喫茶店で行っていた。そういうことでもオリンピック・パラリンピックは開催できる。 1972 年の札幌オリンピック開催時には、地下鉄の開通、札幌駅前のビル化など物理的な変化があった。アジェンダ 2020 で盛んに出てくるのは「持続可能性」。これに沿ったコンセプト作りを行わないと選考から漏れる可能性がある。 これからのまちづくりに際しては、エネルギー・廃棄物・環境問題を含めた「スマートシティ」を実現することによって札幌が生まれ変わる。選手村をスマートシティにする、水素自動車を導入する、新しい競技場に太陽光エネルギーを取り入れるなど工夫をして、これからの地球の街は札幌がモデルとなってほしい。 東京は「おもてなし」だが、札幌は環境・リサイクル面を含め、「人にやさしい」としたい。まだ開催地が決まっていない2025年スペシャルオリンピックスも前段として招致のアピールとなる。
川本委員	1972年札幌オリンピック開催時には大学4年だった。札幌に戻り街の変貌を実感した。72年札幌大会の参加国・地域の数は35だったが、ソチ大会には88の国・地域が参加している。トリノ、バンクーバー、ソチそれぞれの大会にも行ったが、札幌大会には意義があった。 加森委員からあったよう多くの国民から協賛を得るためには、建設費を抑えること、地球環境、グローバルの視点が必要。バリアフリー、高齢化社会への対応も課題。そして第二のサスティナビリティとして継続可能なものにしていかなければならない。 企業がスポーツを支援する文化をぜひつくっていただきたい。 土屋ホームが世界で戦える選手を社員に擁して14年目を迎える。 オリンピックに葛西紀明、伊藤有希を輩出しているが、昔日本がまだまだ貧しかった時代から選手を応援してきたことが現在につながっている。
久保委員	パラリンピックはまだ普及の段階で、選手、競技面含め発展途上にある。 パラリンピアンとしては、次につながる大会にしたいと考える。 昨年ソチパラリンピックに出場したが、そこで初めて全競技を衛星放送でライブ中継と録画中継された。 大会終了後にたくさんの反響があり、「初めて競技を見ました」との声が多かった。選手として残念だったのが、「新聞、インターネットやニュースで結果は出るが競技中の映像が見られない。どうしたら見られるのか」「私は衛星放送の契約していないので見られない」という声が多く寄せられたこと。そこをどうしたらいいかが選手たちの課題。競技と同時に情報発信していかなければならな

	い。次世代のパラリンピアンのためにも、2020 年東京夏季大会、そして札幌冬季大会とつなげてより良い環境、より良い大会を遺したい。 オリンピック・パラリンピック開催都市の福祉は注目されるときく。バリアフリーのまちづくりは障がい者スポーツの普及につながるという思いで活動していきたい。
霜觸委員	1972 年札幌大会では恵庭岳の滑降コースを 15 年、2 億円以上かけて復元し、負の遺産を後世に伝え、学習している。 今度の大会では、2012 年ロンドン夏季大会のコンセプトが役に立つと思う。 大会後 20 年先を見据えて利用できる、できない施設、縮小、廃止などの仕分けをきちんと行い、その後のロンドンの発展につなげていった。 再び札幌で開催するときは、パラリンピックを重点的にアピールしていくことが必要と思う。オリンピックと融合して開催するまで技術力・運営力が高まるかはこれからの研究だが、施設面でも競技者の視点で建設できればと考えている。 競技施設ばかりでなく都市をどうしていくのか。1972 年札幌大会では都市のインフラ整備が進んだが、今度はぜひバリアフリー化し札幌の街を作り変えていくという気持ちで整備が進んでいけばよい。 これからは、若者より 65 歳以上の高齢者の人口が非常に増えていく。大会を目指してのバリアフリー化が確実に高齢者社会、将来につながる。それが積雪寒冷地の札幌でもできることが世界にアピールできればいいと考える。
豊島委員	札幌大会開催時には生まれていないが、秋田出身の私もオリンピック・パラリンピックが日本で開催されたことに誇りを持っている。私よりもっと年下の世代には札幌市民であっても札幌で開催されたことを知らない人も多いと思う。 昨年の「冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る市民アンケート」では「賛成」・「どちらかといえば賛成」と答えた市民合わせて 66.7%となった。これが多いか少ないかの判断ではなく、3 割ほどの市民が賛成ではないことに注目した。この方々にも賛成してもらえるような、みんなで行えるオリンピック・パラリンピックにしたい。 最近は、アジェンダ 2020 にもあるようにエコなオリンピック・パラリンピックが注目されている。競技施設等では「仮設」「改築」でお金をかけないことにネガティブなイメージを持ちがち。「札幌では仮設でもこれほど素晴らしい施設ができる」「昔のものを再利用しているが、国際基準に適合した素晴らしい施設になっている」といったことで建て替えへの意識改革ができる大会になればいい。 夏の 2020 年東京大会に続き、短い期間に札幌で冬の大会開催が実現されることに期待している。「夏は東京で見た、冬は札幌で見た素晴らしい選手のよう

	になりたい」と、子どもたちのスポーツへの関心を高めることになればいい。札幌開催を、スポーツを広める手がかりとしたい。
中田委員	1972 年に住み慣れた東京を離れ、札幌に来た。既に札幌市の人口は 100 万人を超えており、オリンピックと同年に政令都市になった。その際に札幌市民が「地下鉄ができたよ」「どれだけ街が変わったか」などと興奮して話してくれたことを楽しく思い出す。 もっとさかのぼると、14 歳のときに東京オリンピックをきっかけに住み慣れた原宿から目黒に移り住むこととなり、街がオリンピックによって変貌することを実体験した。 札幌オリンピック開催 20 年後、バルセロナ大会時にヨーロッパに行った際、サッポロシティから来たというと通用する、北海道よりも知られていると教えられた。これも札幌オリンピック開催の大きな成果だったと思う。 次に開催する際には、アジェンダ 2020 にもあるように、札幌のみではなく「分散開催」も視野に入れるべき。資料にも世界に冠たるニセコ、富良野が出てきているが、札幌のみならず北海道全域、場合によっては青森あたりも視野に入れて、広域での開催ができないか。あまりに離れていると移動しにくいということもあるかと思うが、そういったことも考えた上で広域開催を検討いただきたい。 そのために必要なのは、やはり札幌市と北海道の連携。高橋はるみ知事と秋元市長、副知事と副市長の連携ということもあるが、最終的には現場担当部署間の連携を果たして初めて、道民・市民・海外からのお客様もワンストップでサービスを受けられる状況になる。 サッポロシティは冬季アジアスポーツ発祥の地でもあり、ウインタースポーツの先進地。これを誇りとして開催に臨みたい。
原田委員	「つながる」をテーマに挙げたい。 1972 年にオリンピックが開催されて札幌は急成長した。雪国でも 190 万都市となった札幌はすでに世界に知られている。スキー競技で世界中を回ったが、札幌を知らない人はほとんどいない。素晴らしい街を前面に打ち出して自信を持って開催したい。 スポーツの歴史も受け継がれて、国際大会も開催され、選手も成長し活躍した。 市民もそれに感動して勇気をもらったものと思う。このような遺産・レガシーをまたつないでいくことがテーマとなっていくと考える。 アジェンダ 2020 には持続可能性という言葉が本当にたくさん出てくる。IOCもつなげていこうということを前面に打ち出している。札幌市が歴史をつないできた

	おかげで、我々は今ここにいる。札幌市民がもう一度手と手をつなぎ合ってオリンピック・パラリンピックを成功させたいと思う。 2026 年にはアジアの札幌ではなく、世界の日本が、札幌が、世界中が驚くようなオリンピック開催の名乗りを上げてはどうか。 今後、札幌で新しい運営ができ、新しいオリンピック・パラリンピックだったと言われるような大会を目指すのはいかがかと思う。最近大会がマニュアル化し、選手側から見て前回大会と同じことの繰り返しという思いがある。選手側の意見の反映が新しいオリンピックにつながると考えている。
穂積委員	現在は千歳市役所の観光スポーツ部に勤務している。スピードスケートでは 2 回オリンピックに出場しており、選手の視点とサポート側の視点から考えてみた。 選手・監督・関係者が札幌に来てよかったと思えるオリンピック・パラリンピックにすることが重要。入賞者・メダリストを見て感動した子どもたちが「ああなりたい」と思うことによって次世代につながる。長野オリンピックでスピードスケート陣、原田さん率いるスキージャンプ陣がメダルを獲得したのを見て、小学生だった私はメダリストになりたいと思った。自分がメダリストになれたのは、原田さんのおかげと感謝している。 札幌にナショナルトレーニングセンターが生まれることは素晴らしい。日本人の選手が感動を与えるプレーをすることで、札幌で開催してよかったと思われる。 自分自身は、オリンピック開催の 1 年前から大会に向けたスピードスケートの練習ができた。可能であればもっと前から日本選手だけでも練習できる環境を国が整えていただくことも重要ではないか。 現在は千歳市に住んでいるが、福島県出身。「未来（あした）への道 1000Km 縦断リレー2015」に参加してきた。外で遊ぶことが難しい被災地の子どもたちから、オリンピアンに触れ合えるのは刺激になると言われた。ソチ大会にも被災地の子どもが見に来ていた。オリンピックを通じて次世代につなげるということを考えていただきたい。
三谷委員	公募委員として市民の目線でお話しさせていただきたい。私は十勝出身で、身近にウインタースポーツがあった。スピードスケートの清水選手はあこがれの方だった。 世代的には 1972 年の札幌オリンピックには全く関わりがなかった。身近の方々のオリンピック・パラリンピックへの関心も両極端と感じる。 私は札幌市内の真駒内屋外競技場、大倉山ジャンプ競技場に勤めていたこともあり、オリンピックは身近にあった。若い世代に自ら発信していきたい。

	10 年後くらいに私たちが札幌オリンピック・パラリンピックを背負う際には、72 年札幌大会で市民がどのように携わりどのように感じたかを、当時実際携わった人と今の若い世代とで意見交換させていただきたい。オリンピック、パラリンピックともに若者が周知に関わるきっかけとなればいいと思う。 私自身、札幌市の観光ボランティアに携わっており、世界・日本各地から訪れた方が観光都市として札幌は十分魅力的だとおっしゃる。私たち若者世代から発信できるように、冬季大会の 2 度目の開催に向けてプライドをもって臨みたい。
山本委員	「なぜオリンピック・パラリンピックをもう一回開催するのか」はとても重要。 私自身は、スポーツ関係者ではあるが「まちづくり」が最優先と考える。どういう街にしたいのかというグランドデザインの中でオリンピック・パラリンピックがどのように活用できるのかという順番でものごとを考えたい。 190 万都市の札幌にこれだけ大自然が隣接している。鮭の遡上する川が流れ、標高が低いにも関わらずパウダースノーが降る、世界的でも稀な街。文化的にはクリエーティブな産業も札幌をベースに伸びている。 その延長上で、「どういう街をつくっていくのか」というコンセプトの中で、「オリンピック・パラリンピックをどう位置づけるのか」が非常に重要。さらに人がどう変わるのか、特にウインタースポーツのライフスタイルとしての定着が必要。 知り合いの冒険スキーヤーの児玉毅さんの「バックカントリースキーの後コーヒーを飲んで会社に行く」というライフスタイルをある種のモデルとして実現できるのが札幌。そういうクールでクリエーティブなまちづくりの基本設計がある中で、今回のオリンピック・パラリンピックを位置づけて弾み石とするという考え方が重要かと思う。 皆さんのご意見の中には「融合」「シームレス」「継続」「つながる」ということが出てきた。過去と未来、オリンピックとパラリンピックもそうだが、今まで培ってきたものが未来に続いていくという大きなグランドデザインの中で皆さんと議論したい。ウインタースポーツというものをきっかけに、例えば「自然と大都市の融合」、「過去と未来がつながる」などをイメージしながら素敵なまちづくりにオリンピックが生かせるような方向で議論を進めたい。
原田委員長	それではここまで出てきた意見も含め、小林副委員長にご発言をお願いする。
小林副委員長	大学生の時、1972 年札幌オリンピック開催に伴い選手村と仮設食堂、プレスセンターの建築について手伝った。その後札幌の街が大きく変わった。建築だけでなく都市もきちんと考えなければならないということで、都市計画に携わるこ

	ととなった。何らかの形でお返しをしたいと思う。 資生堂の福原義春名誉会長が、東京オリンピック・パラリンピック招致でスポーツと文化をセットで考えるというプレゼンテーションをされた。 「2016 年開催招致では内容の濃いプレゼンテーションを行えなかったが、2020 年開催招致では自分でも満足する話ができた。2012 年ロンドン大会では開催決定後の 4 年間にイギリス国内で文化・芸術イベントが 18 万回開催され、4 万人くらいのアスリートやアーティストが参加し大きな集客も得たことを調べ、東京はそれに勝る内容で招致したいと述べたことも成功につながっていると信じている」とおっしゃっている。 2026 年札幌招致の際にも、スポーツと文化の連携を考えなければならない。 ふと立ち止まってみると、72 年開催以降の札幌では、実は非常に文化的な取り組みを進めている。札幌コンサートホール「Kitara」があり、民間のサポートでPMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）も開催されている。昨年は札幌国際芸術祭も開催された。 72 年当時、札幌はスモッグ都市だった。中心部から大倉山シャンツェが見えないほどで、道路の雪は真っ黒だった。今では信じられないが、72 年招致にあたっては環境に配慮した街にしようという気運が同時並行的にあった。 つまり、札幌はスポーツ、文化、環境を併せて進めてきた。その後、世界で知らない人はいない札幌になったのだと思う。 これから 2026 年開催招致を考えるときに、どのように世界に評価される中身にするのか、いろいろな面で宿題が与えられている。 札幌市は長期的な計画をつくっているが、市民感覚ではリアルにわからないのが現実。しかし、2026 年のオリンピック・パラリンピック札幌開催、2030 年の北海道新幹線札幌延伸となると、「今から数えて何年目」「具体的にどのようなことがあるのか」と市民の方もイメージが持てる。秋元市長から先ほどお話があったように 2030 年には札幌市の人口は 10 万人減少すると予想されている。長期的にはさらに減少する。そうした状況の中で我々は次の世代に何を遺していくかを問われている。 オリンピックの枠組みとしては二つのベクトルで整理すべきと考える。 一つは「都市化」で、プラスだけでなく負の部分をどう解いていくかも含めた、新しい意味での「都市化」であり、二つ目は皆さんおっしゃっていたが、パラリンピックを含めながら、「より人間らしさを回復する」こと。さらに加えて、より未来を長期的に見据えながら、また世界を、北海道、あるいはアジアを見据えながら、きちんとした枠組みをつくり、市民の方に、北海道民の方に、アジアに、世界にわかるように我々の意思を整理し示すことではないかと考える。

原田委員長	今日ご欠席の志済委員のご意見をあらかじめ伺ってきたので、まとめたものを事務局からお願いする。
事務局	志済委員から送られていたご意見をお手元にお配りし、ご説明する。 （どんなオリンピック・パラリンピックにしたいのか） 平成２５年に策定した「札幌市まちづくり戦略ビジョン」を踏襲し、持続可能なさっぽろのまちづくりに寄与できるオリンピックの開催を目指すべきと考えます。 特に実現したいことは以下のとおりです。 １） 札幌の新しい魅力を世界中の人々に実感・体感してもらい、新しい国際都市のモデルを実現する （ア） 国際輸送、道内輸送手段の拡大（人、モノ） （イ） 外国人ボランティア招聘・スタッフの雇用、海外企業招致の促進 ２） 札幌市が後世にわたってサステナブルに発展できるような戦略的投資の実現 （ア） 既存施設の再利用や集約化により、新規施設へ過剰投資や広域化による非効率化を抑制する （イ） ハコモノ中心ではなくIT やコンテンツといった ‘ソフト’ 主体の投資を促進する。 （ウ） 低炭素型オリンピックの実現 （オリンピック・パラリンピックを通じて何を遺したいのか） １） 日本の札幌ではなく、グローバル都市 ‘Sapporo’ としての基盤とノウハウ ・国際企業誘致 ・外国人労働者、居住者の受け入れ ・交通・情報 HUB 機能の高度化 ・IT インフラ、デジタル社会インフラ ２） 都市機能の集約化、連携、高度化による、人口減少社会においても持続可能な都市基盤 ３） オリンピックでの経験を通じた若い世代のグローバル化のためのノウハウ （ア） 国際人としての意識、ダイバーシティ教育 （イ） 世界中の優秀な人材が集まる都市づくりの知恵
原田委員長	それでは、私の方で皆様のご意見をまとめながら、キーワードの整理、あるいはコンセプトの視点などを述べさせていただく。 四つのキーワード（コンセプト）をお話しするが、1 点目は「つながる」としたい。

	原田雅彦委員からも「歴史をつないできた」、「今の札幌があるのは 1972 年から歴史をつないできた」というお話があった。「過去と現在」のつながりもあれば、山本委員からあったように「都市と自然」のつながりもある。あるいは「札幌と世界」、たくさんご発言いただいたが「健常者と障がい者」のつながりもある。「つながり」は非常にいいキーワードになるのではないか。「つながるオリンピック・パラリンピック」ということになると思う。 2 点目は中田委員からも出ていたが、やはり「独創性のある計画」ということが重要ではないか。IOCはオリンピックムーブメントが永続するような計画を求めている。過去の大会を振り返るよりも未来の大会に向けての提案が重要となる。 一つは種目で、「新しい種目」の提案も可能になると思う。 もう一つはアジェンダ 2020 にもあるように「分散開催」。分散することによって札幌、北海道、そしてオールジャパンの体制がつくれるので、本州への種目分散ということも考えられる。「札幌でしか開催されていない」ではなく、身近なところで分散開催ができれば、オールジャパンの動きにつながる。今後の検討課題にもなると思うが、1998 年の長野大会のレガシーも活用させていただくなど独創的な計画が今後必要になると思う。 3 点目のキーワードはやはり「レガシー」ではないか。一つ私からの提案だが、オリンピック・パラリンピック施設を作った後、それをどう転用して日常施設に変えるかという発想で計画はつくるが、ぜひそれを逆転して、まず日常的に使う、そこでそれなりの収益が上がる施設を計画する、それをオリパラ施設に転用する、仮設施設を加えるといった発想の転換をしていくことが重要と考える。 ロンドン大会の評価が高いのは、やはり「レガシー」。LLDC というロンドンのレガシー開発公社がすべての施設の後利用を行いながら収益を上げていることがある。そういった視点がことさら 2026 年招致には重要になってくる。 施設をつくっても使う人がいないと無駄となる。そこにはイベントの招致、あるいは観光客がたくさん訪れることが必要となる。 昨年日本では人口が 30 万人減ったそうだが、その消費減を 30 万人の中国人観光客の消費が補ったということもある。今後スポーツに関する観光、あるいはスポーツで人を動かす仕組みをつくっていく、それをレガシー、あるいは街のにぎわいに結び付けていくことも重要と考える。 4 点目は皆様からも様々なご意見をいただいたが、「まちづくり」と思う。 山本委員が示唆に富んだお話をされたが、やはり体を動かしたくなるような「まちづくり」 。日本の都市は経済効率一辺倒でつくられてきたので、歩道は狭く車最優先社会になっている。ライフスタイルを変えていくような、移住したい、ここに住みたいという夢の生まれるような「まちづくり」も重要。

	バリアフリーの観点では車歩道の段差解消とか電線の地中化は当然のことだと思う。世界に誇れる観光先進都市、コンパクト性と車に頼らないモビリティを十分に活用したアクティブなトランスポーテーションを備えた独創的なまちづくりの計画が実現すると非常にいいのではないかと思う。 それでは若干時間があるので、少し個別にご意見を伺いたい。 「アジアにおけるウインタースポーツの拠点」というキーワードが抽出された。北海道、札幌でのウインタースポーツ振興への取り組みが重要になるが、ご専門の山本委員からお願いする。
山本委員	先ほどライフスタイルの話をしたが、実は次世代の子どもたちが雪や氷で遊ぶ文化が衰退しているのが現実。様々なデータをとっても、日常的にウインタースポーツに親しむ人は、どちらかというと減少傾向にある。 私は東京出身で、北海道は食べ物を含め素晴らしいと思うが、ライフスタイルの中に芸術、スポーツなど文化的なものが充実することで、街としてとても魅力になってくると考える。スキーもスケートも親しむ人が減っている。オリンピック・パラリンピックを起爆剤にして増やすという考え方もあるが、まず基本的には地道にウインタースポーツの魅力を伝えながら弾みをつけるものとしてオリンピック・パラリンピックを使えるといいと思っている。機会があればウインタースポーツの現状等についてはご報告させていただきたい。直接携わっている方には私以上に詳しい方もいらっしゃるかもしれないが、いずれにせよウインタースポーツが衰退していることはある。
原田委員長	開催概要計画書にはアスリートの意見が重要となっているが、小笠原委員、久保委員、原田委員、穂積委員にプラスアルファのご意見いただきたい。
小笠原委員	日本では歴史は浅いが世界的には 500 年の歴史があるスポーツであるカーリングを続けている。3 年前に札幌市に施設をつくっていただいたおかげで、私も復帰して競技生活を続けさせていただいている。現在、施設の利用が非常に多く、私たちも予約がとれないほど稼働率が高い。施設の整備を札幌市にお願いしてきたが「蓋を開けたらからっぽでは」と不安だったが、連日満員の状況を見てうれしく思う。札幌市内はもちろん、道内、道外からも、例えば観光の家族旅行で来た方が「オリンピックで見たカーリングの施設がある」とふらっと来場する。身近な競技として浸透し喜んでいる。 私の育った常呂近隣の小・中・高等学校では、カーリングが体育の授業に組み込まれており、オリンピック選手を毎回輩出する街となった。カーリングのみな

	らず、北海道・札幌で子どもたちが様々なウインタースポーツ競技に携われる選択肢があればいいと思う。ボブスレー、リュージュもあり、札幌ではジャンプのイメージも強い。そこから「オリンピックがあるんだ」「自分たちも目指してみようか」という気になる。私も長野オリンピックのとき、カーリングがオリンピック種目にあるということで、親に頼んで生で見に行かせてもらった。おかげで私も目指して 4 年後にその場に立つことができた。やはり、日本で目の前にオリンピックがあるということは、子どもたちにとって意義のあること。スピードスケート・フィギュア・アイスホッケーなども含め、様々なスポーツに携われること、施設面でも整備していけばいいと思う。
久保委員	障害者スポーツセンターが北海道にはない。東京にはいくつかあって、本州には各地に、九州にもある。スポーツやイベントの情報を共有できる場がある。 私は高校 3 年生のときに交通事故に遭って車いす生活となったが、その時にパラリンピックでスポーツをやろうと思った。まず道具をどこで購入して、誰に教わってどのようにやればいいのかというところから始まった。 北海道はそういう面でまだまだ遅れていると感じる。パラリンピックの選手たちもそのあたりはすごく苦しんでいると思う。どうしても本州の方に行って情報をもらってくるのが現状となっている。
原田委員	（今の久保委員の意見は）選手の意見が反映されていないことを感じる意見だと思う。 何でこんなところにこんなものをつくったのかなと、我々からすると感じられることが多々ある。そういったところをやはり改善していくべき。 実は昨日、平昌に行ってきた。大会開催は 3 年後だが、施設がまだ 4 割 5 分くらいしかできていない。「とにかくオリンピックが開催できればいい」という状況で、プレオリンピックでは実施されない競技もある。 札幌ではやはり「人を成長させるオリンピック・パラリンピック」を開催すべきと考える。
穂積委員	スピードスケートの話になってしまうが、オランダはスピードスケートが国技で、お休みの日でもリンクが満杯。年齢層も子どもから大人、お年寄りまで普通に、スケートが生活の一部として定着しているスポーツ。それを見て、これが強さの背景なのだと思った。スケートは屋外・屋内と様々なパターンがあるが、スケート人口の減っている中では身近となってもらえることが重要だと思う。何かしらのきっかけづくりがあればと、この札幌オリンピック・パラリンピック開催検討も含めて考えていければいいと思う。

原田委員長	今後大会コンセプトを基に競技会場などの配置計画をつくっていくことになると思う。これは新しい札幌のまちづくりに大きく関わっていくことと思う。 都市計画ご専門の小林副委員長に、最後にご意見頂戴できればと思う。
小林副委員長	先ほど建築から都市づくりに自分の領域を変えたというお話しを申し上げたが、その時にあるヨーロッパから来たアメリカ人の方から言われた。「まちづくりというのは、建物、道路、公園をつくることが目的ではない。その街に生まれた子どもが、その街に住み続けたい、そこで仕事をしたいと思い仕事が見つけられる、それが街をつくっていく本当の目的なんだ」と教えられた。なるべくそのようなことを含めて考えたいと思っている。 札幌市も将来どのような街にするかをいろいろな分野で考えている。経済、福祉、道路をつくる部署もある。戦略的に新しい産業をどうつくるかなどを考えているセクションもある。いろいろな考え方、アイデア、場所などを、2026 年の招致をきっかけにしながら、より分かりやすく、より説明しやすく、しかも納得のいくように市民の方に伝えて、民間の方と協力しながらそれを実現していくということが大事だと思った。図面に描くということだけでなく、それがいろいろな意味で分散しがちな行政に横串を入れて明快にするというのが招致の議論ではないかと思った。
4　閉会	
原田委員長	みなさま、ありがとうございました。これで今日の会議を終了させていただく。 第 2 回目の会議では、ウインタースポーツの振興についてのご提言を山本委員に、今後の北海道・札幌のまちづくりについてのご提言を小林副委員長にお願いしたいと思うがいかがか。（山本委員、小林副委員長了承）。 委員のみなさん、多様なご意見ありがとうございました。 事務局は各委員の意見を整理し大会コンセプト案の骨子の作成を進めていただくようお願いする。 これをもって第 1 回目の委員会を終了する。 なお、第 2 回目の委員会は 9 月 3 日（木）17 時から開催する。